

子どもの豊かな感性・思いやり・協調性を育む 自然とのふれあいを大切にする

ドイッの
園づくりツアー 2019

第2班

実施レポート

日 程 2019年8月25日(日)～31日(土)

視察地 ドイツ ハンブルク、シュネベルディングン、ブレーメン

参加者 15名



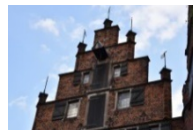
子どもたちの心とからだの成長は、五感を通じて自然とふれあい、自然の美しさや不思議さを他者と共有することで促されます。このことから、幼児施設での日常的な自然体験は、保育・幼児教育における大切な要素と言えます。『園庭ビオトープのある園』は、乳幼児期の子どもたちが、日々、安心して自然とふれあい、豊かな感性や思いやり、協調性、想像力などを育む場所として最適な環境です。

本ツアーでは、北ドイツのハンブルクなどを訪れ、複数の保育所・幼稚園や、環境センターなどを見学するとともに、ハンブルク大学教育学部にて座学を受け、ドイツにおける乳幼児期の自然とのふれあいの取り組み動向などについて学びました。また、あわせて、シュタイナー教育を実践する幼稚園も訪問し、教育法などについてお話をうかがいました。これはその実施レポートです。

視察企画：（公財）日本生態系協会

目次

訪問先の位置	3
--------	---



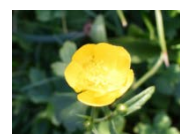
ハンブルクにおける保育・幼児教育の背景など	4
-----------------------	---



ホーエンブーヘン保育所・幼稚園	6
-----------------	---



ゾーネンヒューゲル保育所・幼稚園	8
------------------	---



グート・カールスハーエ環境センター	10
-------------------	----



ハーブルク森の保育所・幼稚園	12
----------------	----



ブランケネーザー・ヴァルドルフ幼稚園	14
--------------------	----



アム・ジョーダン保育所	16
-------------	----



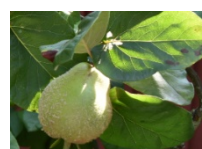
自然保育所・幼稚園ココベリ	18
---------------	----



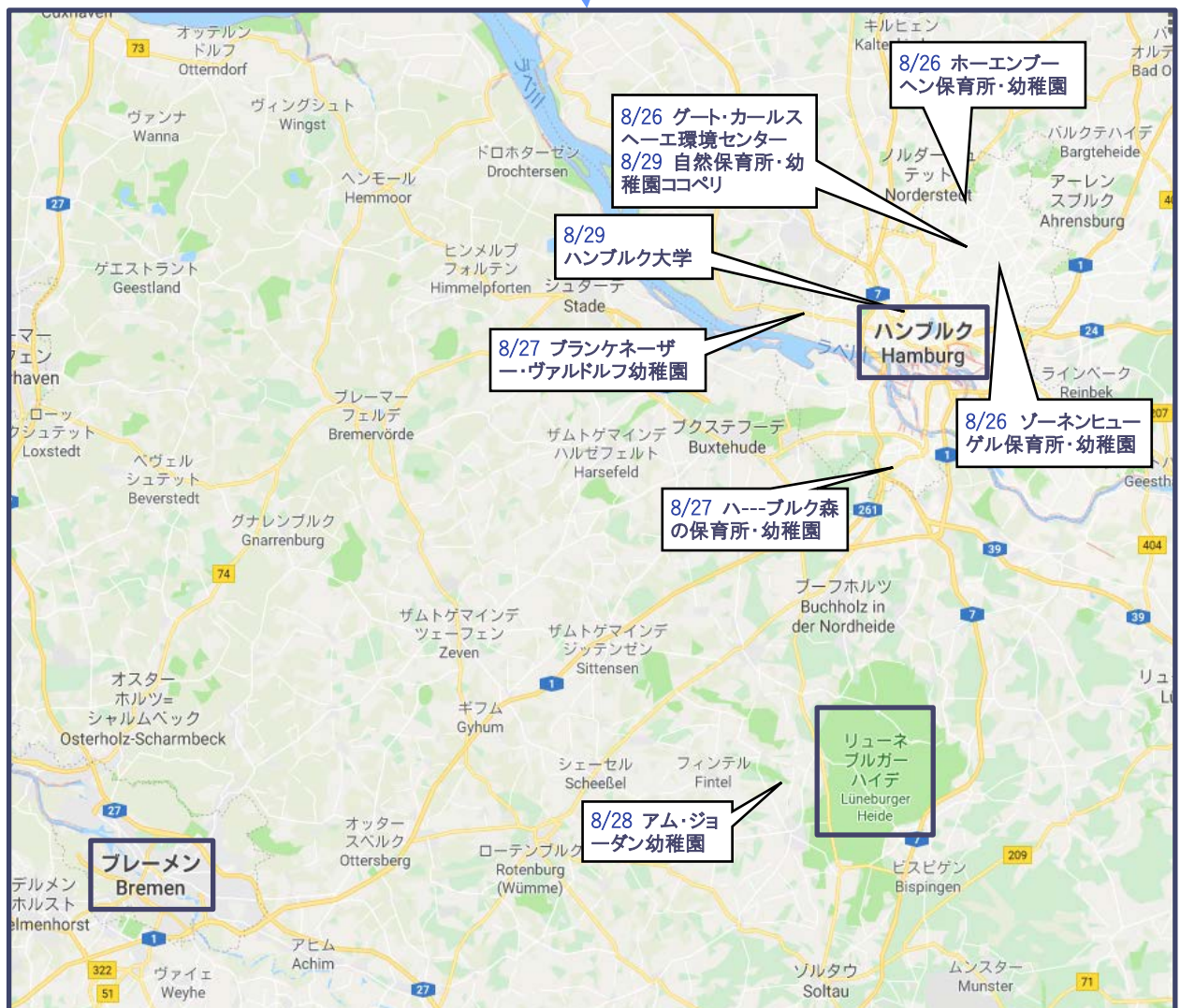
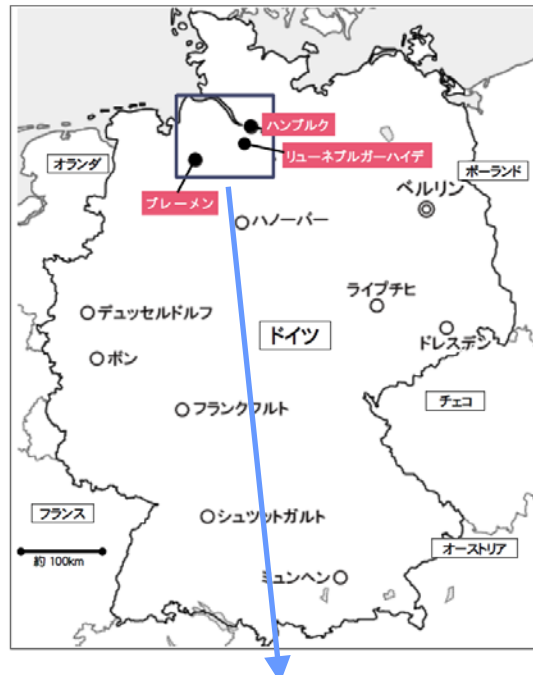
ハンブルク大学教育学部	20
-------------	----



番外編(旅の風景)	22
-----------	----



訪問先の位置



ハンブルクにおける保育・幼児教育の背景・状況など

ハンブルクの保育・幼児教育の手引き

ツアー中に話題に上ったこの手引き。正式名称は『Hamburger Bildungsempfehlungen für die Bildung und Erziehung von Kindern in Tageseinrichtungen』といい、日本語では『幼児施設における子どもの育成と教育のためのハンブルグ保育・幼児教育の手引』というような意味です。

この手引きは2005年に作成(2012年再版)されたもので、ハンブルクにある保育所や幼稚園などの施設は、手引きに沿って園づくりを行うこととなっています。教育分野として、『身体・運動・健康』、『社会・文化的環境』、『コミュニケーション:言語・読み書き・メディア』、『絵画・工作など芸術的教育』、『音楽』、『算数』、『自然・環境・科学技術』の7項目が掲げられています。自然・環境・科学技術の項では、子どもは五感を使って直接的な体験をすることで、自然について知り、自然の事象を理解することが可能として、直接的な自然体験を促しています。



連邦政府の園庭の生物多様性を高めるプロジェクト

日本と同様、生物多様性条約に批准しているドイツでは、その約束を果たすために『生物多様性国家戦略』を策定し、それに基づいて、都市や農地における生物多様性の保全回復プロジェクトなど、多岐にわたる取り組みを実行しています。地域在来の植物を園庭で育てるなど、身近な生きものたちとの日常的なふれあいを促す園づくりの支援もそうした取り組みの一環です。連邦環境・自然保護・原子炉安全省が全国規模で進めているプロジェクト『保育所・幼稚園の子どものための庭 ～一緒に多様性を発見しよう～(ドイツ語 Kinder-Garten im Kindergarten – Gemeinsam Vielfalt entdecken)』は、絶滅の危機にある多様な野生生物に対する保護の意識を幼少期から育てることをねらいとしています。

生物多様性の豊かな園庭などについての情報交換や交流のための全国ネットワークが設置され、ここには約200の園が参加しています。プロジェクト参加園に参考情報を提供する目的で、現在までに3種類の冊子が発行されています。2015年7月に、第1弾の『保育所・幼稚園の子どものための庭 一緒に多様性を発見しよう! ～自然豊かな園庭は生物多様性を高める～』が発行され、翌16年4月には、同『生物多様性豊かな遊び体験』が発行されました。第2弾の主要テーマは『五感を使った自然体験』で、この冊子のP12～15に、ハンブルク大学教育学部のゲプハルト教授のインタビュー記事が掲載されています。

共生社会に向けた保育・幼児教育

自然豊かな園づくりだけでなく、共生社会の形成に向けた取り組みも進んでいます。『インクルーシブ(またはインテグレーション)保育・教育』は、障害の有無や年齢・性別・人種・言語・文化・宗教的背景の違いにかかわらず、一緒に遊ばせながら、子ども一人一人の保育や教育的ニーズにあった支援を行うというものです。3～6歳の異なる年齢だけでなく、園によっては1～2歳の乳幼児も年長の子とも一緒にグループで遊ばせています。また、園の運営や園庭管理、行事の企画実施などを保護者と連携して行うための取り組みも進んでいます。インクルーシブ保育・教育は、子どもたちの他者への理解を深め、思いやりの心や助け合いの精神を養うのに役立ち、保護者との連携は信頼や協力を得るのに役立っています。

子どもを守るための制度

ドイツでは、1歳になった子どもは何らかの施設で保育を受けることが法的に保障されており、通常は1歳を過ぎてから、早い子では8カ月くらいから保育所に入園します。どうしても預かってくれる保育所が見つからない場合、保護者は自治体などに対して訴訟を起こすことも可能です。このことにより、ハンブルクにおける乳幼児の保育施設への入園率は現在98%となっているそうです。

また、ハンブルク市では、1～6歳までの園児に対して1日5時間分の保育料(一人当たり月額約600ユーロ)が補助されています。この補助金は、市から園の運営団体にまとめて支払われます。園ではこうした補助金の一部を園庭ビオトープづくりに当てることもできるそうです。

他方、SNSなどの利用が拡大するなか、子どもの肖像権の侵害の増加などの問題が深刻化しています。こうした事態から子どもを守るため、ドイツでは、個人的な子どもの写真を保護者の許可無く撮影し、ソーシャルメディアなどに掲載することが禁止されています。グループ写真を撮影する際にも、保護者一人一人の承認・署名が必要になることもあるようです。

ドイツ労働福祉団体(AWO)

ドイツ労働福祉団体(AWO: Arbeiterwohlfahrt)は、医療・福祉分野で社会に貢献するドイツの公益団体のひとつです。社会、健康、家族、雇用関連の福祉サービスを提供する全国組織として、1919年に創設されました。ボンにある本部を中心に、国内全域に広がる支社ネットワークを有しています。民間福祉団体として、この国の福祉サービスを長期にわたり担ってきたAWOは、人間は、民族、国籍にかかわらず、全て平等ということを理念に掲げ、難民の救済などにも力を入れてきました。ほか、保育所や幼稚園、青少年や高齢者、障害者向けの施設の運営や管理など、多岐にわたる社会福祉事業を展開しており、福祉の分野では、なくてはならない存在となっています。AWOハンブルク支部は、市内の約20の保育所・幼稚園を運営しています。今回のツアーで訪問したうち、ホーエンブーヘン、ゾーネンヒューゲル、ハーブルク森の保育所・幼稚園の3か所がAWOハンブルク支部の所属園です。

持続可能な開発のための教育(ESD)

2002年、国連ヨハネスブルグ・サミットにおいて、日本政府とNGOの共同提案により、『国連持続可能な開発のための教育(ESD)の10年』が採択されました。これを受け、『国連ESDの10年国際実施計画』(2005年～2014年)が2005年に策定され、ユネスコを中心に世界各国にその推進が呼びかけられました。計画期間後の2014年以降も、引き続き、持続可能な開発のための教育の更なる推進強化が求められるなか、ドイツでは、人格形成上最も重要な幼児期に、協調性や豊かな感性、健康なからだ、新しい時代にふさわしい考え方や行動などを育むため、『野生の生きもの』、『水』、『土』、『太陽の光』を重要視して、園庭や園舎を見直す動きが加速しています。

ハンブルクは、『ユネスコ学習都市に関するグローバルネットワーク(UNESCO GNLC)』の一員です。これは、学習都市の国際的なプラットフォームで、都市が抱える様々な課題の解決には、世界中の都市が『持続的な学習都市』へ変革していくことが重要として、ユネスコが立ち上げました。現在、50か国170の都市が参加しています。ハンブルクは、GNLCの参加都市として、健全な環境やより暮らしやすい都市づくりを推進するために、学習の機会の拡大に取り組み、SDGsの目標達成に向けた貢献もしています。

ホーエンブーヘン保育所・幼稚園



自然豊かな園庭に出た途端、子どもたちは穏やかでとても幸せそうになります

最初に訪問したホーエンブーヘン保育所・幼稚園は、ハンブルクの中心から北に20kmほどの場所にあります。園の入り口へは橋を渡っていきます。橋の下はホーエンブーヘンタイヒという湿地で、その水は、近くを流れるアルスター川につながっています。アルスター川と園の間には、ホーエンブーヘンパークの樹林が広がっています。ここでは園長のシモーネ・タルハマー氏よりお話をうかがいました。

この園には1～6歳までの子どもたち約130名が通っています。1～3歳の保育部門のグループが2つと、3～6歳の幼稚園のグループが3つあります。ドイツでは夏休み後に新年度が始まるので、グループ編成はつい先日行われたばかり。各グループには、異なる年齢の子どもたちを混ぜて遊ばせています。これは年長の子どもは年少の子どもの質問に答えたり、面倒を見ることで自信が得られ、年少の子どもも年長の子どもをモデルに様々なことを学べるからだそうです。このほか、インクルーシブ(またはインテグレーション)のグループも1つあり、14名のうち4名が障害をもつ子どもだそうです。

各グループは、社会福祉、保育、健康管理など、異なった教育を受けている保育士たち4名で対応しています。子どもたちを預かる時間は6:00～18:00までの最長12時間で、8:00までの間に保護者が子どもたちを連れてやってきます。持参してもらっているお弁当には、プラスチック、包装用ラップ、アルミ箔は使わず、紙などの自然の素材を使ってもらうようにしています。



ホーエンブーヘンパークの樹林の中に建っていた看板には園の名称の上に自然を学ぶ場所(Lern Ort Natur)と記されています



上: ホーエンブーヘン保育所・幼稚園は、森の中の道を進み、橋を渡ったところにありました
下: 橋の下に見えたホーエンブーヘンタイヒの湿地。



ホーエンブーヘン保育所・幼稚園の園舎の一部

園舎内には、マット運動もできる体育の部屋、お姫様や大工さんなど、様々な衣装に着替えて劇やごっこ遊びができるシアター、カプラの積み木の部屋、絵を描いたり工作をしたりする部屋、おままごとの部屋などのほか、キンダーレストランと呼ぶ、子どもたちに料理の様子などを見せる部屋もあります。子どもたちは、自分でカウンターに料理をとりに行き、料理人と会話を交わすことで、社会的なことを学べる場所となっています。この園では、食事について、個々の子どもに必要な時間を与えて自分のペースで食べることを奨励しています。ゆっくり食べる子どもを急かすと、大人になって摂食障害を起こすことがあるからです。スピード化の一途をたどる世界のなかで、子どもたちは、いつも急かされているので、この園では食事に関してはそれぞれの子どもに必要な時間を十分に与えているそうです。

ドイツ語で『高いブナの木』という意味の名前をもつこの園では、自然とのふれあいを一番大切なことと考えています。この園は、1974年に、農家だった土地を譲り受け、建物を改築して創設されました。牧歌的な風景のなかにある1haの敷地内には、外庭、中庭、高いブナの木があるところの3つのエリアがあります。子どもが自然と親しむことを目的につくられた園庭には、昔から生えている果樹の古木、この地域在来の植物の茂みや草原などがあるなど、自然体験のための要素が散りばめられています。

子どもたちの自発性を重んじ、保育者は、子どもたちから質問があったら答えるという形をとっています。子どもたちは、自発的に木や野草の観察などを行っています。そうすることで、子どもたちの生きものや自然を守ろうという気持ちが自ずと高まるそうです。子どもの運動能力向上にとっても大事ということから、園庭には高低差をつけてあります。園庭に生えている木は、どれも登ってよいことにしています。

園長先生は、「子どもたちは、室内に入れておくと不満で落ち着かなくなる傾向があるが、自然豊かな園庭に出た途端、ゆったりと穏やかでとても幸せそうになり、その差は歴然です」と語られていました。



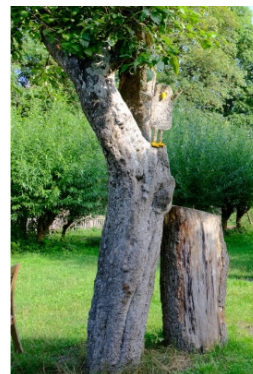
園庭で採れた果物などでおもてなししてくださいました



たまご色を基調にした明るい園舎内



園庭はゆったりしていて太く大きな木が何本も生えていました



ゾーネンヒューゲル保育所・幼稚園

幼少期から様々な生きものと親しむことで保護意識が育まれる

『太陽の丘』の意味を持つゾーネンヒューゲル保育所・幼稚園は、ハンブルクの中心から北東に約13kmの位置にあります。近くに、市が所有する『ベルネルの森』があるなど、自然豊かな環境に恵まれています。この園には、約50人の子どもたちが通っており、10人の保育士で対応しています。1968年の設立から半世紀、この園はたくさんの子どもたちを見守り、育んできました。40年間勤務している保育士や、子どもの頃ここに通っていた保育士もいるなど、地域のコミュニティと深い絆で結ばれています。この日は、森のグループの担当で、子どもの時にこの園に通い、保育士になって戻ってきたマリアさんよりお話をうかがいました。

この園では、インクルーシブ教育を実践していて、年齢の異なる子どもたちを一緒にグループに入れているほか、障害のある子どもたちも受け入れているそうです。また、セラピールームもあり、特別の資格をもった療法士が週に1度来所し、心の問題などを抱える子どもたちのセラピーを行っています。

この園には、子どもたちが自然について興味をもって学べるよう、マリアさんを中心に保育者が集めた標本がたくさんあります。標本には、野鳥の巣や卵、ハチの巣などのほか、クモやサソリなど、ちょっと驚くようなものまであります。子どもたちはスコープ付の観察ケースなどを使ってそれらを観察します。また、2枚のガラスを平行にセットしたなかに土を入れてミミズの生態を調べる容器もあります。幼少期から、様々な生きものに親しむことで、野生生物を身近に感じ、保護意識が育まれるそうです。



「このアシナガバチの巣は今朝家から持ってきました」いろいろな標本を見せてくださったマリアさん



左上： どの窓からも園庭の緑が見えました

右上： キンダーレストラン。年齢に合わせて、テーブルの高さや椅子の大きさが異なっています。小さくてもテーブルマナーはしっかり身に付けさせています

下： お昼寝用2段ベッド。下のベッドは引き出し状になっていて普段は上のベッドの下に収まっています

右下： コンパクトに収納が可能な長ぐつ置き場



すっきりした緑色で統一した清々した雰囲気の一部屋



園庭には、シラカバなどの木立やミツバチが好むような野草の草むら、ハーブの花壇のほか、昆虫たちのビオトープにもなる腐葉土を作るための『落ち葉だめ』もありました。園庭の周囲に生えた大きな木は、夏には心地よい日陰を提供します。ある程度の高さまでなら木登りも許しているそうです。設立当初狭かった園庭は徐々に拡大し、隠れ場所や小山など、遊びの要素も増やしているそうです。園から1kmほどの養蜂場に子どもたちと見学に行き、ミツバチは大切な生きもので、何もしなければ刺さないことなどを学んだので、子どもたちはいつも園庭の野草にミツバチが来ることを楽しみにしているとのこと。

園では、2006年に、週に1度森に出かけるグループをつくりました。2歳、3～4歳、5～6歳のグループに分かれ、複数の保育士と『ベルネルの森』に出かけます。ブナ、トネリコ、カシ、モミジなどの大木が生えている森には、シカなどの哺乳類や野鳥、昆虫もたくさんいます。キツツキの開けた穴のある木も多くあります。森の中には、花や葉、木の実や小枝、倒木など、既製のおもちゃにはない、自由な発想で遊べるものがたくさんあります。子どもたちは、『遊んでよい範囲を守る』、『生きものを驚かすような大声を出さない』、『生きものにいたずらしない』など、森の中での遊びのルールを守りながら、自由にからだを動かして遊び、実体験から多くのことを学んでいます。



園庭の大きな木にかけられていた野鳥のための巣箱



右：腐葉土を作るための『落ち葉だめ』。これも昆虫などのビオトープになります



歩いて4、5分のところにあるベルネルの森で



グート・カールスハーエ環境センター

大切なことは、自分自身で体験すること

グート・カールスハーエ環境センターは、ハンブルク市中心から北東に約12kmの位置にある緑のオアシスのような場所です。国境や時代を超えて、共有すべき大切な自然資源を将来世代に手渡すための暮らしについて、自然体験を通じて子どもから大人まで一緒に楽しく学ぶために、2008年に設置されました。センターの管理運営は、同年に設立されたハンブルク気候保護財団という非営利組織が受け持っています。財団は、『ドイツ環境自然保護連盟』(BUND)ハンブルク支部や『ハンブルク・ブランフェルド地区養蜂家協会』などのNGOと連携して、イベント運営などを行っています。センターの案内は、ココペリの森のグループにお子さんを通わせていたという生物学者で環境教育専門家のシルヴィア・シューベルト氏にいただきました。シューベルト氏は、3年前に家族で日本を訪れたことがあるそうで、自然が豊かな長野県の日本アルプスなどがとても印象に残っているとのことでした。

ハンブルク郊外にある9haの敷地内には、自然豊かな草原、原生林と呼べるような森、水辺などが広がっています。『発見の道』の木道や湿地のデッキからは、自然をまじかに観察することができます。ハチの巣の構造やミツバチの行動について学ぶ学習用養蜂箱、とわらと泥で作られた昔の養蜂箱もあります。牧草地にはヒツジが10頭以上飼育されていて、ヒツジとのふれあいが楽しめます。5月の毛刈りのデモンストレーションには、多くの人々が訪れお祭り騒ぎになります。散在果樹園では、自然草地と果樹が織りなす美しい景色に出会えます。



上：シューベルト氏による室内でのレクチャー
左：昔領主の館だったという重厚感漂う環境センターの建物



右：水辺のデッキからは、水中に何がいるのか網ですくって観察できます。子どもだけでなく、大人もついはいしゃいしてしまうプログラムだそうです。「さー、今日は何が入っているかな？」
左：トレイルに沿って進むと、草地の先に水辺がありました

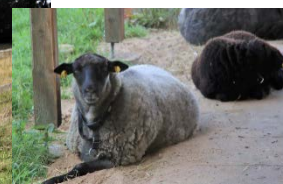


センターの建物は、昔の領主の館だったそうです。センターの職員は12名。事務局長のほか、環境教育や生物、気候変動などを専門とするスタッフが働いています。できるだけ多くの人に、自然や環境教育の機会を提供するため、センターは日の出から日没まで一般市民に無料で開放しています。また、保育所・幼稚園、学校などにとっての貴重な自然学習の場にもなっていて、多くの園や学校のグループが日常的に利用しています。約400の保育所・幼稚園、400～500校の小中学校が来訪し、利用者全体では年間6～7万人に及びます。子どもたちは、センターが用意した教育プログラムなどを通じて、スタッフから自然や野生の生きものなどについて、体験しながら楽しく学んでいます。

見学時にいくつかの教育プログラムを試してみました。水辺のデッキから網で水中の生きものをすくって観察するプログラムは、大人にも大人気だそうです。この日はカエル、オタマジャクシ、アメンボのほか数種の生きものが見られました。森の中で鏡を上に向け樹冠部だけを見ながら歩くプログラムでは、いつもと全く違った景色が体験できました。また、太陽光の熱量を体感する実験では、太陽光線の強さを実感しました。

シューベルト氏によると、子どもたちに人気があるのは、森の丸太の上をバランスをとって歩くなど、人工的に整えられていない自然のままの環境で自由に行動し、何かを発見するということだそうです。「大都市で9haもの土地を環境教育のために使えるのはとても幸せなこと」と微笑むシューベルト氏。「子どもたちにとって大切なこと、それは自分自身で直接体験することです」と物静かながら力強く語られました。

『発見の道』の木道は、私たちが森の中へといざなってくれます



上：地元種の珍しいヒツジを飼育している牧草地。5月の毛刈りのシーズンには多くの人が訪れ、お祭り騒ぎになります



古いタイプの養蜂箱(上)とデモンストレーション用養蜂スタンド(左)



強い太陽の光で、指がすぐに熱くなりました

森の中を、鏡に映る樹冠部だけを見ながら歩くプログラム。全く違った世界が見えて新しい発見ができました



ハーブルク森の保育所・幼稚園



子どもを信頼し、どこまでやれるか自分で判断させています

森の幼稚園は、自分の子どもを自然のなかで遊ばせたいという一人の母親の願いと努力が実を結び、1950年代にデンマークで生まれました。ドイツでは、1990年代初頭にフレンスブルクに初の公認の森の幼稚園が設立され、その後全国に広まり、現在、様々な形態のものを含めて2000か所近くあるとされています。そのひとつ、ハーブルク森の保育所・幼稚園では、園長のコリナ・ラデケ氏をはじめ、数名のスタッフの方々にご対応いただきました。

この園は、ハンブルクの中心から南に約10kmの森の中にある創設20年の森の保育所・幼稚園です。3～6歳のグループが2つ、1グループに20～22名の子どもたちがいます。22名までであれば2名のスタッフで森での遊びの対応ができるそうです。ほかに2～3歳の保育のグループが1つあり、5名の子どもたちがいます。受け入れ時間は7:30～16:00までです。

この園は、森の園としては珍しく、園舎の建物と砂場などがあります。敷地はハンブルク市の土地を借りています。屋上緑化がとても素敵な園舎はAWOが20年前に建てました。園舎内は、コンパクトで使い勝手がよさそうでした。子ども用の暖炉付きミーティングルームもあり、真冬の極寒の日には暖炉に火をともし楽しんでます。ほかに身体に障害をもつ子やコミュニケーションをとるのが苦手な子などがセラピーを受けるセラピールームもあります。子どもたちは1日の大半を森の中で過ごしていますが、夏の間は、森で食べ物を広げるとハチなどが寄ってくるので、おやつと昼食は園舎に戻ってとるそうです。



屋上緑化が素敵な園舎（左）と小さい子のお昼寝の場所になっているバウワゴン（右）



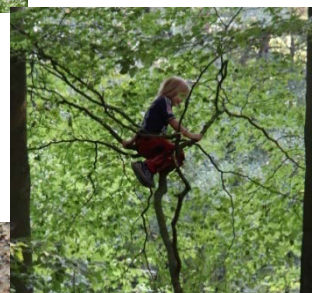
園舎の周りの木には複数の野鳥やコウモリなどのための巣箱がかけられていました



森までは列になってみんな歩いていきます
森に着くやいな子どもたちは森の奥へと我先に走り出します



下：ノコギリ、ナイフ、ピーラーなどを使って遊んでいる子もいました



上：年長さんは木登りも自由にできます

子どもたちが毎日を過ごす森はハンブルクが所有管理する自然保護地域で、無料で使用させてもらっています。園のそばに営林署があり、営林署のスタッフは、森の管理だけでなく時々子どもたちと一緒に森に行き、木の名前や特徴などを教えてくれるそうです。また、木の枝を組んで遊具を作ってくれたり、悪天候の後など森が危険な状態にある時に連絡をしてくれたりします。

保育者たちは、自らの仕事は子どもたちの森での発見の後押しをすることという認識から、子どもが多少思い切ったことをしてもむやみに止めることはしません。子どもを信頼することが大切なので、どこまでやれるか自分で判断させています。ただし、森の中でのいくつかのルールを設けています。例えば、『森に入るときは先生より先に行ってもよいが、印をつけた木のところでみんなを待つ』、『木登りは年長の子もだけで、ブナなどの丈夫な木を選ぶ』、『沼に行ってはいけない』など。また、ナイフなどの使用も事故やけがをしないように、使い方も教えたうえで許しています。子どもたちもそうした森でのルールをきちんと守っています。

ここに子どもを預ける保護者は、自らも自然の大切さを理解し、子どもをこうした環境で育てたいと希望している人で、遠くは車で45分ぐらいかかるところから登園してくる子もいるそうです。



森の中には、小さなキノコや花、大木までいろいろなものが観察できます。
丸太も横木も積み上げた枝も、楽しい遊具に早変わり



園舎のすぐ近くにある営林署の建物



ブランケネーザー・ヴァルドルフ幼稚園

草花は摘むと枯れるという直接的な体験から命の尊さを学ばせています

シュタイナー教育(Waldorfpädagogik)は、20世紀はじめのオーストリアの哲学者・神秘思想家ルドルフ・シュタイナーが提唱した『教育芸術』(Erziehungskunst)としての思想およびその実践で、神智学などに基づいています。ドイツではヴァルドルフ教育と呼ばれているこの教育法は、日本に紹介された際に、ルドルフ・シュタイナーの名前をとって、『シュタイナー教育』と呼ばれるようになり、現在、日本国内ではこちらの呼称が一般的となっています。今回訪問したブランケネーザー・ヴァルドルフ幼稚園では、長年この園の運営と教育に携わってきた園長のパウルス・シャルフ先生に案内していただきました。また、声楽家のお父さんの仕事の関係で1年ほどハンブルクに滞在している日本の女の子も、私たちの訪問を歓迎してくれました。

この園には、3歳以下のこどもたちのグループ1つと、4～6歳の子どもたちのグループが2つの合計3つのグループがあります。年齢を混合することによって、他者に対する寛容さが身につく、模倣や経験から様々なことを学ぶことができ、さらなる発達につながっているということです。

園舎内は四季の変化が表現されていて、子どもたちは遊びながら四季折々の雰囲気を感じることができます。遊具やおもちゃは、可能な限り、木、毛糸、布などの自然素材のものが用いられているものの、「シュタイナー教育が提唱されて1世紀、時代は移り暮らしや社会の様子も変わりました。園で自然素材を使うようにしても、家庭では違うというギャップに子どもが混乱しないよう、時に応じて一部プラスチック製のものを使うこともあります。100年前のシュタイナーの教えを押し付けるのではなく、シュタイナーの提唱した教育の根幹にある大切なことを伝える努力をしています」と園長先生は語られていました。



園舎内のものでなく、園舎のそとの植物や果樹も四季を感じさせてくれます



左：絵本も自由に読ませているということで、いわむらかずお作の14匹シリーズの『14匹のかぼちゃ』のドイツ語版がありました

園舎内には、木や布のほか、石や貝殻など、自然素材のものがたくさんありました



子どもが自然とふれあう機会が減ってきていることを憂慮しているこの園では、どんな天候でも必ず外で遊ぶことをモットーにしています。園庭には、天蓋付きの砂場などの周りに、大木や草地や茂みのほか、洋ナシやリンゴの果樹などもあります。子どもたちには園庭に生えている草や花を自由に摘むことを許しています。草や花は摘むと枯れてしまうという直接的な体験から命の尊さを学ばせています。園庭の一角には、子どもたちも世話を手伝っているニワトリの小屋があります。ニワトリにもさみしがり屋や怒りんぼなどがあるそうで、子どもたちはニワトリの世話を通じて、生きものたちも人間と同じ心を持った仲間だと理解するそうです。

園の裏手には、ハンブルク市が所有する約2500㎡の森があり、園に開放してくれています。園庭とつながっているため、子どもたちは自由に行き来することができます。キャンプファイヤーの場所だけは作らせてもらいましたが、それ以外は自然のままの状態が保たれています。木は持続性、連続性を象徴していて、それが人間に安心感を与えるのだそうです。森でたくさんの木々に囲まれていると、怒りっぽい子や乱暴な子も、人が変わったように穏やかになるそうです。

自然とふれあえるこの森が使えることは、本当にラッキーだと園長先生は言い、「小さいときにシュタイナー教育の本質が身につけば、結果的にその教育に裏打ちされた大人に育ちます。ドイツに生まれ、ドイツで育ち、ドイツの文化を愛しているので、子どもたちにはその気持ちを伝えていくのが大切なことだと思っています」と付け加えました。

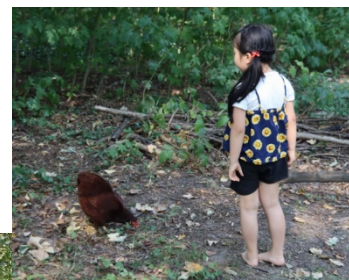


上：木漏れ日のなかの不思議な形の遊具



上：無造作に置かれた丸太も遊具のひとつ

右上：木の枝を積んだビオトープ



アム・ジョーダン幼稚園



自然体験の園庭づくりに終わりはありません

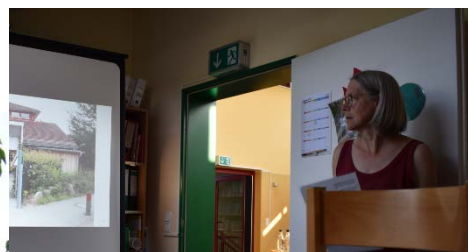
1996年設立のこの園は、リュネブルガーハイデ自然保護区にほど近いシュネベルディンゲン市の施設で、ペーターウントパウル教会が市に代わって管理をしています。2～6歳まで165人の子どもたちが午前・午後・終日のグループに分かれて通っています。保育士数は全部で21名います。ここでは元職員で、現在はボランティアで園庭の管理に携わっているアネ・マデル氏にご案内いただきました。

この園では、『自然のなかで五感を使って遊び、体験することで自然を学ぶ』をコンセプトに、園庭ビオトープづくりを始めました。生物多様性を守るために連邦政府が全国展開しているプロジェクト『保育所・幼稚園の園庭 ～一緒に多様性を発見しよう～』にも参加して、自然教育を積極的に実践しています。約2haの園庭は、当初平坦で大部分をコンクリートが覆い、芝生の部分に遊具が少しあるだけで、面白味に欠けるものでした。そこで、新しいアイデアを得るために園や市の職員が保護者と共に園庭づくりのセミナーを受けたり、子どもたちにほしい園庭の箱庭模型を作ってもらったりしました。

新しい園庭の案は、子ども、保護者、市の職員なども交えて、それぞれの考えや希望を共有して作成されました。その際の議論の焦点は、『カエルや昆虫、野鳥などの生きものとの日常的なふれあいができること』、『水や火、土との関わりがもてること』、『四季の移り変わりが感じられること』、『植物を育てたり収穫するなどの経験ができること』などでした。自然とふれあえる園庭づくりは2006年に始まりました。



右：パワーポイントを使って、自然体験のための園庭づくりについて説明してくださった元職員のマデルさん



野鳥観察小屋のような滑り台



草のトンネル



積み枝ビオトープの向こう側に見え隠れするブランコ



まず、一面を覆っていたコンクリートをはがし、地面を掘り、土盛りをして、たくさんの凹凸をつくりました。そしてたくさんの木々や野草を植えました。石、砂利などの材料はすべて地元で調達し、樹木も在来のもので使いました。費用の一部は、保護者や地元の企業が寄付をしてくれました。保護者だけでなく、近隣の学校の生徒たちも作業に協力してくれて、園の子どもたちと一緒に汗を流しました。そうしたことで、子どもたちは園庭づくりの仕事に携わる楽しさを心から実感できたようです。多くの人が協力を買って出てくれたため、一人当たりの仕事量は思いのほか少なくてすみました。

園庭が完成に近づいたころ、隣の小学校の先生や保護者の希望で、この小学校でも約30種800本の木を植えて校庭ビオトープをつくることになりました。これが発端となり、この取り組みは次々と飛び火して、今では市内の大半の小学校に校庭ビオトープがあるということです。園の隣の小学校では、校庭ビオトープが完成した2009年以降、生徒間の喧嘩がほとんどなくなったそうです。また、休み時間つまらなそうに教室に残っていた子どもたちが皆嬉々として校庭に出て活発に遊ぶようになったそうです。

今、アム・ジョーダン幼稚園の園庭の地面にはたくさんの凹凸や高低差があります。地域在来の中低木のトンネルや垣根、茂みがあります。『ナツシュ(つまみ食い)ガーデン』では、子どもたちはなった実を自由にとって食べてよいのです。ミツバチが訪れる野草の草むら、ミミズなどの虫が来るのを観察する場所や虫宿、野鳥の巣箱などもあります。生きものの多様性と発見に満ちた園庭で、子どもたちは木登りをしたり、野鳥の声や虫の羽音に耳を傾け、虫メガネで観察し、五感を使って遊び、体験しています。保護者にも自然に関心をもってもらおうと、一緒に園庭を観察し自然体験する『自然の日』を月1で設けています。

マデル氏は、「新しい園児や保護者が入る度に新しいアイデアが生まれます。自然体験の園庭づくりに終わりはありません」と楽しげに語られていました。



園庭には、たくさんの木々のほかに、ミツバチがくるように、いろいろな野草が植えられています。そのほか、虫宿や野鳥のための巣箱、石垣で作ったハーブ用の花壇などがあります



右：アム・ジョーダン幼稚園の園づくりを模範につくり変えられた隣接する小学校の校庭。平坦で芝生しかなかった頃に比べ環境が大きく改善され、子どもたちの様子にも大きな変化があったといえます



自然保育所・幼稚園ココペリ

 自然のなかで自由になることが、子どもにとってとにかく重要

自然保育所・幼稚園ココペリは、教育のための支援を行なうルドルフ・バリーン財団が運営しています。90年の歴史をもつこの財団がかかえる園は、現在ハンブルクに19か所あります。人格形成やからだの成長にとって幼児期の自然とのふれあいは大きな価値があるとして、財団が運営する園では、園庭ビオトープや森での五感を使った直接的な自然体験を重んじています。訪問時は、温かい雰囲気のある園舎や自然とふれあうためにつくった園庭を回りながら、園長のジェフ・ヘルム氏よりお話をうかがいました。

設立22年目の自然保育所・幼稚園ココペリには、0～6歳の子どもたち140人が通っています。3歳までの保育のグループが2つ、2～6歳の森のグループが2つ、3～6歳までの園庭で過ごすグループが4つあり、保育士22名で対応しています。森のグループにするか、園庭ビオトープのグループにするかは、入園時に保護者が選択しています。園舎の外には、園庭ビオトープと自然素材の手作り感のある遊具が共存しています。園の隣にグート・カールスハーエ環境センターがあるほか、少し離れた場所にこの園が所有する『ベルネルの森』もあります。



左： 部屋の入口にあった
Willkommen(歓迎)の文字



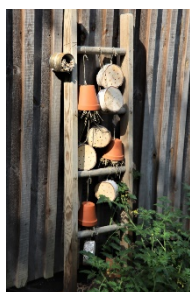
上： ココペリのマーク。『ココペリ』は、健康、成長、安泰などをつかさどるインドの神様の名前。豊かな成長への願いが込められています



園が大切にしていることは、『自然とのふれあい』と『子どもの参加』です。近年、コンピューターゲームなどに熱中する子どもが増え、他者とのコミュニケーションやからだを動かすことが減るという問題が深刻化しています。このことから、この園では、毎日自然豊かな環境のなかで、五感を使って、障害の有無や年齢の違いを超えて一緒に遊ばせたり、プロジェクト活動に参加させたりすることで、子どもたちの心とからだの発達を促しています。一緒に過ごすことで、子どもたちはお互いの異なる点や能力を認め、相互理解や思いやりの心が芽生え、協調性が育まれるといえます。

この園では、特定のテーマを掲げ、それについて調べたり表現したりするプロジェクトを実行しています。プロジェクトを通じて、ハンブルク保育・幼児教育の手引きの7つの教育分野の活動が網羅できるように努力しています。例えば、ジャングルのプロジェクトでは、子どもたちはそれがどういう所か、何が住んでいるのかなどを一緒に調べ、歌を作ったり絵を描いたりしてジャングルを表現しました。中世のプロジェクトでは、騎士の仮装をしたり、中世風の太鼓を作ったりしました。1つのプロジェクトは6週間かけて実行します。2週間のインターバル後、次のプロジェクトを開始します。皆で参加・協力して活動することで、小さい子が無意識のうちに様々なことについて学ぶことができ、また、大きい子は小さい子に教えることで自信につながるなど、プロジェクト活動は子どもたちに大きなプラスの効果を生んでいるそうです。

この園では、園庭ビオトープや森での遊びは、子どもたちに自由に決めさせています。園長のヘルム氏は、子どもを室内だけで遊ばせているとストレスが溜まり、時に喧嘩をすることもあるが、自然豊かな環境では、そうしたいさかいは見たことがないそうです。「子どもにとって、自然はなくてはならない不可欠なもの、そのなかで自由になることが、子どもにとってとにかく重要」という言葉が印象的でした。



上：大らかな虫宿
下：上から水を流して遊ぶ遊具



自然とふれあいながら遊ぶ要素が園庭全体にちりばめられています



上：少し成長しすぎた柳の木のトンネル
右：細木の上をバランスをとって歩く遊具
左：土も自然の要素であることから、どろんこ遊びも思う存分させてあげるそうです



ハンブルク大学教育学部



幼少期の自然とのふれあいは、自然を愛し、人を愛する人間をつくる

1919年創設のハンブルク大学は、ハンブルクの中心地に本部を置く国立大学で、国内4番目の規模の4万人以上の学生が在籍しています。教育学部教授のウルリヒ・ゲプハルト氏は、1995年よりハンブルク大学で教鞭を執られ、自然が心身の発達に与えるプラスの影響や、自然と健康、持続可能性と生物の多様性、学習過程における感覚と体験および潜在的・直感的発想などを研究テーマに、多くの著書や論文、記事などを発表されています。ハンブルク大学ではゲプハルト教授より、自然体験が子どもの心とからだの健全な成長にとっていかに重要かについて、多くの研究者・科学者の言葉やアンケート調査の結果を引き合いに説明していただきました。

哲学者イマヌエル・カントの言葉に、「人間は、自然の美にふれることによって、自分の魂が洗われることを感じる」というのがあります。自然は、昔、危険・リスクというもののシンボルとして見られていました。しかし近代の技術の向上により自然災害の怖さがある程度克服できるようになって、自然を恐れ怖がることなく、美しいと感じられるようになりました。これは人間の進歩によるものと言えます。

精神分析学者 アレクサンダー・ミッチェルリッヒが、「自然は人間の個性を形づくるものであり、自然を顧みない都市開発は、子どもたちの精神の発達に支障をきたす」と説いていますが、子どもには、水や土、太陽光、大気、野生の生きものといった自然の基本的要素が必要であり、「自然とのふれあいが減り、社会の中での他者とのコンタクトが減ることは、子どもの精神面に悪影響を及ぼす」、また「幼少期に自然とふれあうことがないと、人は自然の素晴らしさを理解できない大人になる」と述べています。幼少期の自然とのふれあいは、自然を愛し、人を愛する人間をつくる、それは大人になっても変わらないそうです。

アメリカの景観設計士リチャード・ハーグは、「現在の子どもの多くが自然不足症候群(Nature Deficit Syndrome)にかかっている。自然体験を怠ると人は病気になる」と警鐘を鳴らしています。



上：レクチャーを受けたハンブルク大学教育学部の建物。
左上：「人間や動物は、教えられなくても本能的に自然を愛するという特性を持っています。それがバイオフィリア」

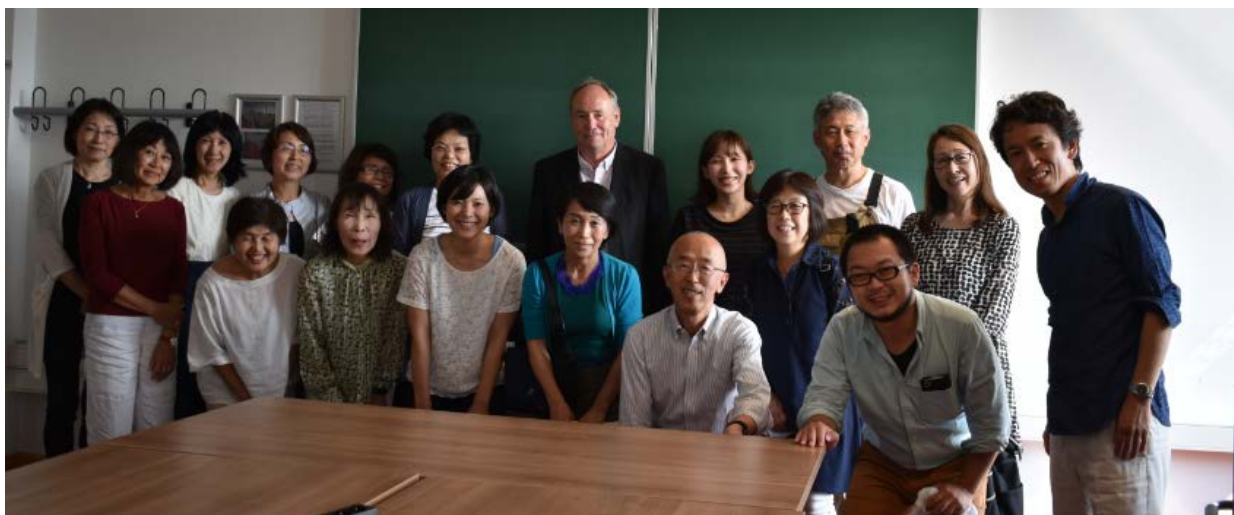
2018年、教授が子どもたちに実施したアンケートでは、「自然が必要か」という問いに対し、80%が「自然は必要」と回答しており、その理由は「自由になれるから、冒険ができるから」としています。また、「どういう所に行きたいか」という問いには、人工的な遊び場や遊園地ではなく「森、草原、荒野、廃墟など」と答え、子どもたちは好奇心が満たされるところに行きたがる傾向があることが分かります。子どもたちが望む環境や場所がどこかを知ることが、都市計画や園庭をつくるうえでとても大切です。子どもが本当に好きで必要とする場所は、自由な場所、冒険ができる場所なのです。遊び場や園庭づくりでも、完全につくり込むことをせず余白を残し、子どもを自由にして、その冒険心を満たしてあげることが重要です。つまり、さりげなくつくった自然豊かな環境が理想的です。

自然体験による精神面の効果としては、気分転換になり、ストレスやうつ状態が解消される、集中力や自尊心が高まるなどが挙げられ、森の中を10分程度歩くだけでもその効果が出て、そうした所に行けない場合は、森など自然の写真や動画を見るだけでも効果があるそうです。ゲプハルト教授は、「自然豊かな園庭は、子どもにとって想像以上の精神的な成長を得ることができる場所だ」とまとめられました。

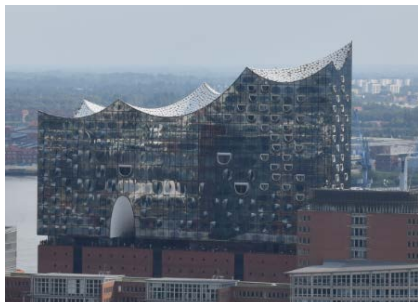


左上：訪問時にいただいたゲプハルト教授とマルテ・ロイパー氏他との共著の表紙『Kind Raus! Zurück zur Natur: Artgerechtes Leben fuer den kleinen Homo Sapiens』（子どもたちよ、外へ出よう！ 自然への回帰：小さなホモ・サピエンスに適した生活）。
 右上：書籍中のウルリッヒ・ゲプハルト教授の文章(P129～139)の最初のページ『Positiv beruehrt Das Kind braucht seinesgleichen』（ポジティブな自然とのふれあい 子どもたちは仲間として自然を必要としている）

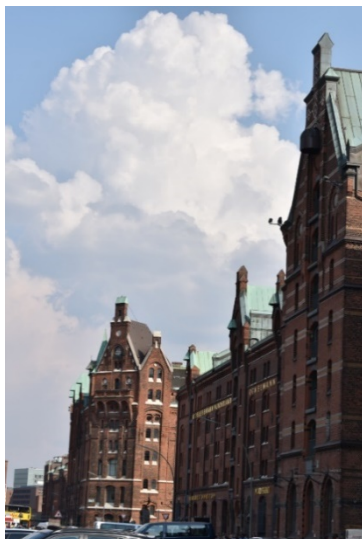
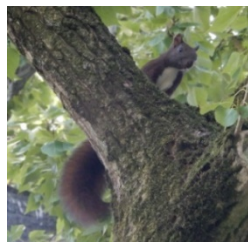
幼少期の自然とのふれあいの重要性について熱く語るゲプハルト教授



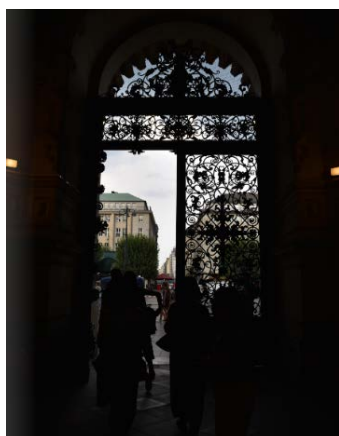
番外編(旅の風景)



上: ユニークなデザインが印象的な
エルプフィルハーモニー・ハンブルク
下: すてきなお店として再利用され
ていた旧商工組合福祉住宅

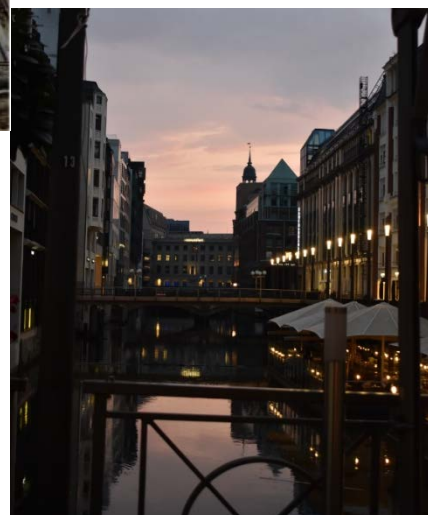


上: 聖ミカエル教会の守護神大天使
聖ミカエル。私たちの旅の安全
を見守ってくれました
下: 教会内では、ちょうど練習中
だった荘厳なパイプオルガンの音
色に包まれました



上: ハンブルク市庁舎を中庭側から見た
様子。下方の女神の像は、疫病(コレラ)
をあらわす竜を倒すギリシア神話の女神
ヒュギエイア

左: ハンブルク
市庁舎の正面
入り口の扉。レ
ースのような繊
細な装飾が美し
かったです



夕闇迫る世界文化遺産ハンブルクの倉庫街



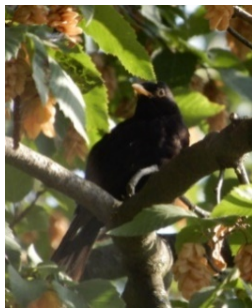
ブレーメンでは夕食に、
キャプテン寿司のお寿
司をいただきました



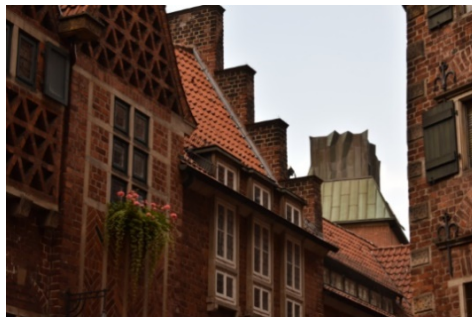
エリカが群生するリュネブルガーハ
イデでは、さわやかな風を浴びて、馬
車ツアーを楽しみました。楽しませて
くれたデニス氏と2頭の馬たち。



ブレーメンは小さい街
ですが、旧市街には見
どころがたくさんあり
ます。聖ペトリ大聖堂
(上)、ブレーメン市庁
舎(右)とその横にあ
るブレーメンの音楽隊
の像(下)



街中でも時折聞こえた
クロウダドリの美しい声





(公財)日本生態系協会は、自然と文化が共存する美しくにづくり・まちづくりを目指して活動するシンクタンクです。私たちの生存基盤である自然生態系を守るために、経済や社会のあり方について国内や海外の情報を広く集め、国際的な視点からさまざまな提案を行っています。そうした活動の一環として、自然を生かした保育・幼児教育の支援に力を入れています。研修会の講師派遣、園庭ビオトープづくり・自然を活かした園づくりのコーディネート・アドバイス、個別の海外視察ツアーの企画など、みなさまのご要望にお応えできるよう引き続き努力してまいります。是非お気軽にご相談ください。